

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	瀧 由紀子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>Effects of Explicit Reading Strategy Instruction: Focusing on Enhancement of Metacognitive Awareness</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 深 澤 清 治</p> <p>審査委員 教 授 中 尾 佳 行</p> <p>審査委員 教 授 築 道 和 明</p> <p>審査委員 教 授 森 敏 昭</p> <p>審査委員 教 授 畑 佐 由 紀 子</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、日本人大学生 EFL 学習者を対象に 1) 習熟度やテキスト難易度に応じた読解ストラテジー使用の特徴, 2) 明示的読解ストラテジー指導によるストラテジー使用の意識や頻度の変化, 3) 明示的読解ストラテジー指導による読解力の変化, を調査し、明示的指導の効果を検討することを目的としている。</p> <p>第 1 章では、明示的読解ストラテジー指導に関する研究の問題点として、以下の点を論じた。1) 訓練に参加した学習者のストラテジー使用傾向が把握されず、教えたストラテジーの有効性と必要性が検証されていない, 2) 教えた個々のストラテジーの指導効果が検証されていない, 3) 収集するデータは読解ストラテジーの使用頻度か読解力の一種類が多く、ストラテジー使用とその指導効果について複合的に究明されていない。そこで問題の所在として、横断的研究を通して学習者の習熟度に応じた読解ストラテジーの使用傾向を調べ、さらに縦断的研究を通して明示的読解ストラテジーの効果を読解力、読解ストラテジーの使用頻度等の複数の要因から調査する包括的な研究の必要性を指摘した。</p> <p>第 2 章では、本研究の目的に即して先行研究の概観を行った。まず読み手の読解ストラテジーに対する自覚度と意識を調査するのに不可欠な概念であるメタ認知の定義を述べ、メタ認知と読解力・習熟度に関する研究を概括した。そして、読解力に大きく影響を及ぼす要因の一つであるテキストの難易度と、本研究の調査項目である読解ストラテジーの使用頻度との関係を論じた。次に読解ストラテジーの分類について述べ、明示的読解ストラテジー指導で取り上げられた効果的なストラテジーを説明した。さらに明示的読解ストラテジー指導が効果をもたらすための要因を論じ、ここまでの議論に基づいて、次の 5 つを研究課題として設定した。1) 学習者の習熟度の違い（上位・中位・下位）は、ストラテジー使用に影響を与えるのか（第 3 章）、2) テキストの難易度は、習熟度に応じてストラテジー使用頻度にどのような影響を与えるのか（第 3 章）、3) 明示的読解ストラテジー指導は、読解力を向上させるのか（第 4 章）、4) 明示的読解ストラテジー指導は、ストラテジー使用頻度と意識を向上させるのか（第 4 章）、5) 教えた各読解ストラテジーの学び易さに相違はあるのか（第 4 章）。</p>			

第3章では、読解ストラテジーの使用について横断的研究（調査1・調査2）を実施した。調査1として日本人大学生 EFL 学習者 163 名（上位 41 名，中位 61 名，下位 61 名）を対象に探索的因子分析を行った。その結果，主旨の推測と要約，背景知識の活性化，文脈からの推測，など 6 因子が抽出され，上位群はストラテジーの使用頻度が高く，一方，下位群は文法と構文を意識する因子以外はすべて低く，中位群はその中間の使用頻度を示した。次に調査2として，大学生 52 名（上位 16 名・中位 16 名・下位 20 名）を対象にテキストの難易度（易・難）の相違による読解ストラテジー使用頻度を調査した。その結果，日本人大学生が使用する読解ストラテジーの頻度は，読解力により相違があるが，テキストの難易度にはあまり影響を受けないことが分かった。

第4章では，ストラテジー指導の効果について縦断的研究（調査3・調査4）を実施した。調査3では参加者は日本人 EFL 大学生 88 名（統制群 43 名，実験群 45 名）で，統制群，実験群とも筆者が指導を担当し，実験群に4か月間，毎週1回30分ずつ合計4時間，4つの読解ストラテジーを教えた。この間統制群は会話練習をし，残りの60分は両群とも TOEIC 対策問題を学習した。その結果，実験群は，1) 読解ストラテジーの使用頻度は，統制群より伸びた，2) 読解力の伸びについては統制群と比べ有意な差はなかった，3) 教えられていないストラテジーの使用頻度も伸びた，ことがわかった。次に実施した調査4では，参加者は日本人大学生 69 名（統制群 33 名，実験群 36 名）で，実験群は筆者が，統制群は筆者の同僚が教えた。実験群には4か月間，毎週1回90分ずつ合計15時間，5つのストラテジーを明示的に指導した。その間，統制群は文学作品を読んだ。その結果，実験群は1) 読解ストラテジーの使用頻度は統制群と比べ伸びた，2) 質的分析においてストラテジーへの意識は向上した，3) 読解力においては，統制群と比べ，有意な伸びはなかった，4) 読解ストラテジーの中には獲得しやすいストラテジーと獲得しにくいストラテジーがあることがわかり，明示的指導により，ストラテジーへのメタ認知の意識は高揚するが，読解力の向上につながるとは限らない，ストラテジーはすべて同じように定着するのではなく，学びやすいストラテジーと学びにくいストラテジーとがあることが示唆された。

本論文の学術的および教育的意義は次の4点に見いだされる。

- (1) 横断的手法と縦断的手法を包括的に組み合わせ，習熟度の相違による学習者のストラテジー使用傾向を調査し，明示的読解ストラテジー指導を実施することにより，指導の効果を検証したこと。
- (2) 明示的読解ストラテジー指導において，各ストラテジーの指導効果を測るテストを作成し，参加者の言語達成度を提示したこと。
- (3) 語彙・構文の難易度の異なるテキスト（易・難）を作成し，日本人大学生 EFL 学習者の読解ストラテジー使用は読解力に影響を受け，一方，テキストの難易度にはあまり影響を受けない結果を提示したこと。
- (4) 発話プロトコル法やポートフォリオによる質的調査を実施し，明示的読解ストラテジー指導の効果に関して量的調査を補完したこと。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 26 年 9 月 30 日